

いのち
生命のにぎわい調査団
いのち
生命のにぎわい通信

第 50 号：発行 平成 31 年（2019 年）4 月

発行：千葉県環境生活部自然保護課
千葉県生物多様性センター

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2
（千葉県立中央博物館内）
TEL 043-265-3601 FAX 043-265-3615
URL <http://www.bdcchiba.jp/monitor/>
E-mail monitor@bdcchiba.jp

身近な鳥の求愛行動

「ホーホケキョ」というオスのウグイスのさえずりが各地で聞こえ始めたことからわかるように、今年も鳥たちの繁殖のシーズンが到来しました。この時期、鳥たちはパートナーを決めるために普段はあまり見せない行動―求愛―を盛んに行います。今回は千葉県で見られる身近な鳥の求愛行動を紹介します。



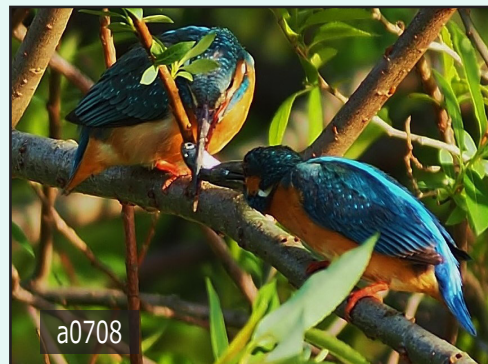
キジ
(求愛ディスプレイ)

本州から九州まで生息する留鳥。平地や山地、河原等、開けた場所を好む。3月頃から雄は「ケーン、ケーン」と大きな声で鳴き、なわばりを主張する。雌はなわばりをつくらず、雄のなわばりを訪問する。その時雄は顔の肉垂を真っ赤に膨らませ、尾羽を扇のように広げてははすに構え、翼の羽を半開きにして雌に接近する求愛行動を行う。



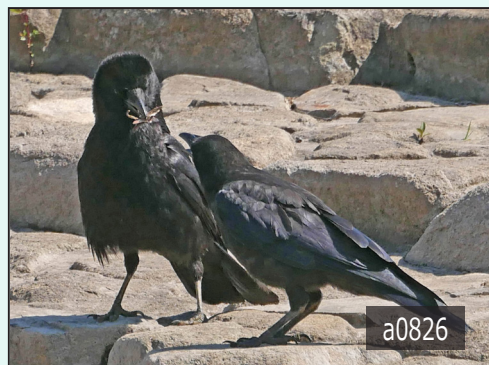
ゴイサギ
(巣材を渡した後のディスプレイ)

本州から九州まで生息する留鳥(本州以南)。海岸、湖沼、河川等に生息し、平地から丘陵地の林にコロニーをつくり繁殖する(4月～7月)。雄は古巣の上で枝をくわえて上下に振る求愛をし、雌が受け取るとつがい生まれ、巣の上で交尾する。枯れ枝等の巣材を雄が探し、雌が樹上に皿型の巣をつくる。



カワセミ
(求愛給餌)

留鳥または漂鳥として本州以南に分布。平地から低山の河川、湖沼、都市公園、海岸等に生息する。繁殖期は3月～8月、4月上旬から求愛や繁殖が観察される。雌雄が互いを意識し始めると同じ枝に止まり、雄が小魚を雌に渡す求愛給餌を行う。雌が餌を受け取るとつがい生まれ、雄は尾を上下に振る。産卵は土手に掘った巣穴で行う。



ハシボソガラス
(求愛給餌)

九州以北に生息する留鳥。平地や山地、農耕地、市街地の公園、河原等に生息する。繁殖期は3月～6月。雄は雌に様々な食べ物や水を飲ませる等の求愛行動を頻繁に行う。巣は樹上の幹近くの枝に小枝を集めて雌雄共同でつくる。営巣期間中はなわばり意識が非常に強いので、不用意に近づくことは避けた方がよい。



ハクセキレイ
(求愛ディスプレイ)

北海道から九州まで生息する留鳥または漂鳥。平地や山地、海岸、農耕地、都市部の公園等に生息。繁殖期は5月～7月。地上で雄は雌の前で、雌のいる側の翼を地面につけ、反対側の翼を高く上げる求愛行動を行う。巣材は植物質や羽毛で、雌雄で営巣場所を探し、雄が巣材を置くと巣作りが始まる。換気扇等の人工物に巣を作ることも多い。



ウミアイサ
(求愛ディスプレイ)

九州以北に渡来する冬鳥。沿岸、内湾、湖沼や池等に生息する。繁殖期は5月～7月で、ユーラシア大陸と北米大陸の高緯度地方で行われる。数羽の雄が1羽の雌を取り囲み、首を斜めに突き出して冠羽を立てたり、おじぎをするように頭を水中に入れる等の求愛行動をする。雌が地上の樹木や草むらに巣をつくる。

参考図書：原色日本野鳥生態図鑑（陸鳥編）、保育社、原色日本野鳥生態図鑑（水鳥編）、保育社、決定版日本の野鳥650、平凡社、増補改訂版 日本鳥類大図鑑 I、講談社、山溪カラー名鑑 日本の野鳥、山と溪谷社

最新の生物多様性に関する情報、各種講習会の情報は、当センターと調査団のホームページをご覧ください
「生物多様性センター」<http://www.bdcchiba.jp/> 「調査団」<http://www.bdcchiba.jp/monitor/index.html>

古典文学と里山の生きものたちの世界

第四回 スッポン *Pelodiscus sinensis* カメ目スッポン科

詩人 大島 健夫

日本の古典文学には、様々な生きものたちが様々な形で登場します。かつてこの国の人々はどのように生きものとかわり、その姿に何を見ていたのでしょうか。この連載では、昨年度から生物多様性センターに嘱託職員として勤務している、ポエトリー・スラム W 杯日本代表詩人の大島健夫が、^{いのち}生命のにぎわい調査団の皆様を過去の世界にご案内します。

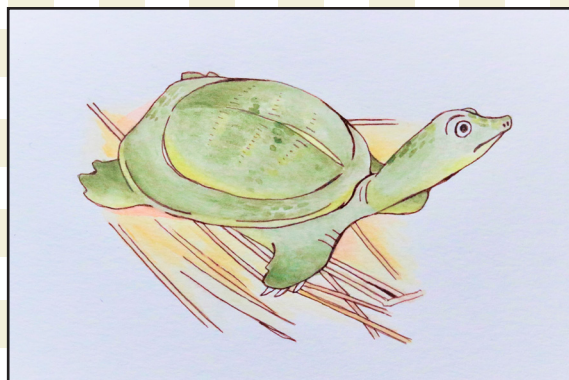
カメなのにやわらかい甲羅、飛び出した目玉、突き出した口。水棲生活に適応したスッポンは、見た目が変わっているだけでなく、「食べるとおいしい」ということがよく知られている点で、社会認識上、特筆されるべき爬虫類と言えるでしょう。

19世紀初頭^{しゅべんしゃいっく}に出版された、十返舎一九^{とうかいどうちゅうひざくりげ}の有名な滑稽本『東海道中膝栗毛』には、主人公の弥次さん喜多さんの二人組が伊豆は三島の宿に泊まるところでスッポンが登場します。

道中、子供が持っていたスッポンを（酒の肴にするつもりで）^{わらつと}買い取った弥次さん喜多さん。その夜、二人が女遊びに浮かれた挙句に寝てしまうと、^{ちようすばち}藁蓐を食い破って出てきたスッポンが喜多さんの布団に入り込み、驚いた喜多さんが放り投げたスッポンは空を飛んで弥次さんの顔面に命中。弥次さんはたちまち指を咬まれて、上を下への大騒ぎ。手水鉢の水につけるとようやくスッポンは放してくれるが、そうこうしている間に二人は財布をすられてしまっていた・・・

スピード感あふれるドタバタコメディーの中に、力が強く藁蓐くらいなら破ってしまうこと、狭いところに入り込みたがること、咬まれるとけっこう痛いが入水に入ると離れることなど、スッポンの生態をそれなりによくとらえています。そして、元来は西日本の食文化であったスッポンがこの時代には東日本でも食され、よく知られていたこともわかります。

ここではコミカルに描かれているスッポンですが、食用として定着した江戸時代中期以降、説話文学の世界ではしばしば不気味な顔を見せています。^{ほご}料理人をとり殺したり^{註1}、命を助けるという約束を反故にした人間に祟ったりする^{註2}のです。身近で長命で姿が特徴的で、それでいながら声を発せず、しかも食用になるスッポンは様々な形で人々の想像力をかき立ててきたようです。



作 石田 理紗

註1 摂陽奇観・巻七「坂町泥亀屋裏」

註2 近代見聞善悪業報因縁集「泥亀を助べき約束を变じ報を受ける」

<これからの季節に観察できる生きもの>

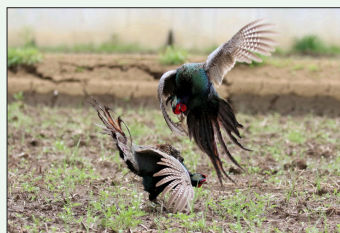
○調査対象種：カワセミ、キジ、ヒガシニホントカゲ、サワガニ、キンラン、オオキンケイギク（外）など

○調査対象種以外

- * 渡りのヒタキ類、サシバなどの猛禽類
- * 各種昆虫、両生類、爬虫類など
- * 希少生物（生息・生育数が減少している生物）、外来生物の報告も受け付けています。

<平成30年度生命のにぎわい写真コンテスト結果報告>

団員の皆様の応募作品 57 点から最優秀賞と優秀賞が決定しました。



【最優秀賞】 千葉 公



【優秀賞】 長妻 輝夫

「縄張り争い!『闘雄図』(キジ♂)」 「キジとアオダイショウのバトルその1」

なんと今回のにぎわい写真コンテストの受賞作品は、両方ともキジをあつかったものでした。どちらも決定的瞬間を見事にとらえ、キジのオスの生態や躍動感がありありと伝わってきます。来年もにぎわい写真コンテストを開催する予定です。ぜひ、生きものの「生命のにぎわい」を写真に収め、コンテストへのご応募をお願いします。